中和田支所（現在の泉区役所）裏駐車場は、「いずみ夏まつり」の参加者で賑わっていた。この祭りは、新しい泉区を構成する地域の人々が、お互いの交流とふれあいを目指して企画した祭りである。

「新区誕生に当たって、これまで違う地域・立場で活動し、生活してきた人々が新しいコミュニケーションを創造するために何かイベントが開催できないだろうか」という問いが、ある会議で区民から投げ掛けられた。こうした問い掛けにこたえるべく、区役所内部で、いくつかの実行可能な事業を検討し、連合自治会長、青少年指導員、体育指導委員などの住民代表で組織する実行委員会に諮った。実行委員会では、私たちの提案した幾つかの案を取捨選択し、地域の実態にあった形に修正し、泉区誕生に合わせて、夏まつり、新区誕生祝賀会、文化祭など六つの行事を連続して実施することを決めた。その第一弾がいずみ夏まつりである。こうして、レールが敷かれると、地域の人たちが積極的に行動に移った。一番の問題は経費であるが、これは、実行委員会のメンバーが地元企業、団体等に協賛を依頼して回るということになった。また、企画からまつり開催日まで準備期間が短かったにもかかわらず、地域の人たちの精力的な活動により、まつりは成功裏のうちに終わり、実行委員会は、休む間もなく次の行事である泉区開設記念祝賀会の準備の取り組みに入った。

このように、私の体験している、地域における三つの事例を紹介したが、私の住む港南台地区と、勤務する泉区では、町の歴史も、構成している人も全く違っている。一方の地域での最善の対応が、他の地域においては全く意味をなさない場合も十分考えられる。今、行政に必要なことは、地域特性を確実に把握し、住民の潜在エネルギーを引き出して顕在化していく能力を備えることではないだろうか。

報告書のなかで、体育指導委員が「行政の予算には、区の自主事業のように、うまくつっつけば出て来る部分がある。こうした予算のからくりを地域活動をしている人が知って、つっついていくといい」と述べているが、このように地域リーダーが自分の置かれている立場をよく理解し、活動をより充実したものとするため、行政に働き掛けてくる事柄も、区の市民課では多く体験するところである。

また一方では、青少年指導員が適切に活動が出来ていない事柄や、自治会役員が毎年変わって活動がマンネリになっている事例も紹介されている。

このように、地域の置かれている状況は千差万別である。一面で活動が停滞していると見える地域でも、他の面での活動が活発になされている可能性のあることは十分予測できるところである。また活動が停滞していても、何かきっかけがあれば活性化できる可能性を持っている地域も多数あることはよく経験するところである。

この、地域のもつ潜在エネルギーを顕在化するためには、何よりも、地域のおかれている状況を的確に把握することが必要である。これまでも、区役所においては、市民課、福祉課、区政推進課等でそれぞれの所管に係る地域情報については、把握に努めてきたところであるが、本報告書を読んで〝重層的構造〟を持つ地域に対して、行政として適切な対応をするためには、このような各セクションの保有する情報の一元化の必要性をあらためて感じたところである。

＜泉区市民課地域振興係長＞

「まち'86」を読んで

石崎和彦

住みやすい街にしたい、魅力のある街にしたい。それは誰もが願っていることであろうと感じ、いろいろな街の人々が様々な形で努力をしているのだということが、具体的に理解でき、非常に参考になりました。

「西谷」というこの小さな街にも、多くの変化、発展があり、その前進を多くの人たちが支えてきたことを改めて感じました。古い街、新しい街それぞれが、その街の個性を持ちながら発展していくというのは、とてもむづかしい事であり、ともすれば単に便利でさえあれば良いと考えてしまいがちです。もちろん便利さ、合理性を求めるのは、当たり前の事であり、少しでも美しく住みやすい街にするために我々も微力ながら努力しているわけですが、合理的で新しければと、そればかり求めていくのも、何かまちがっている感じもしてしまいます。きちんと設計され、美しく植樹された公園や、広々とした道路、整然とした街並み、そして利用可能な多くの公共施設等、本当に見ばえのする近代的な街をめざしていくのか、それとも、街の整備を心がけながらも、宅地化が進む中で、土の暖かさを残すことに力を入れ、例えば、昔話の生き続けられるような街をめざすのかということは、とても大切な事で、話し合う必要性を痛感しています。人が多ければ多いほど、その根本的な考えや価値観は多種多様であり、それだけに「街」に求めるものも様々です。街を愛し、慈しんでいこうと思っている人ばかりではなく、仮りの住い、単なるベッドタウンとしてしか街を感じていない人も多いはずです。だからといって、その人々を全く無視することもできませんし、また、無理やりに協力を求めることもできません。

様々な可能性、方向、そして多種多様の住人たちの願望、価値観の一つの代表のような形で、何か一つの目標をめざして動く時、誰でもたくさんの迷いに悩まされるのではないでしょうか。また、何かを行う時には、行政の力を借りなくてはならないことも多く、それに加えてそれにより生じる街の人々の利害関係も、大きな壁になってしまうこともあります。

多数の人のために、少数の人が不都合をがまんするというのには限界があり、それによって生じる対立があっては、街づくりの趣旨に反するような気もします。

このように、多くの考えや状況をかかえながらも、良かれと思える方向へ邁進する力を持ちたいと感じます。そしてその努力が、わずかでも実を結んだ時にこそ、無関心であった人も、街を見直し、そこから賛否両論が生まれ、それが能動的な住人の姿勢として盛り上がっていけば……と思います。「まち'86」によって、西谷の多くの先輩たちの努力の歴史を読みなおし、同時に他の街の人々の街づくりの活動を知り、もう一度じっくりと皆で話し合ってみたいと痛切に感じました。また、同誌で紹介のあった、西谷地区センターも七月に開館し、ずい分と利用されているようです。このことによっても、人々が、「街づくり」を考え、そして、「西谷」を見直してくれればと願わずにはいられません。

＜西谷商栄会副会長、民生・児童委員＞

魅力ある〝西谷〟に

川崎登美子

一――報告書を読んで

よくまとめられている現状

この報告書は、西谷の状況を大変よくとらえているので、今まで漠然と感じていた西谷の地域性や特殊性について、整理して把握することができた。

ここで指摘されているように、私も、子ども会の活動を通して、同じ町内会の子どもやその親たちと知り合いになった。そして、子ども会の夏の行事、ソフトボールやミニバスケットボールの地区大会で、はじめて他の町会の存在が実感となったが、西谷連合町会という全体像の認識はほとんどなかった。

というのは、このレポートに書かれているように、自分の行動範囲が国道十六号線の南側に限られていて、第一、第二、第六町内会とはほとんどかかわりがない。それに比べ